

大学におけるIRと質保証の 現状と今後の展望

山形大学 学術研究院・教授

浅野 茂

E-mail: asano@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

2016年12月7日 名古屋大学第2回教育基盤連携本部セミナー報告資料



■ 報告の構成

0. 報告のねらい
1. Institutional Research (IR) とは？
2. 米国におけるIRの現状
3. 日本におけるIRの現状
4. 日米のIRを取り巻く環境
5. 山形大学の実践事例
6. まとめ

0. 報告のねらい

- 日本の大学関係者のInstitutional Research (IR)に対する関心と期待は依然として高い。特に、学習成果の把握、教育の質保証、教学マネジメントなど、大学教育の改善に向けた取組が学外から強く求められるに連れ、多くの大学でIRの活用が模索されている。
- 本報告では、報告者がこれまで取り組んできた日米両国のIRに関する研究を概観するとともに、現在、実践している事例の紹介等を通じて、大学における質保証におけるIRの役割や、IRを機能させる要因等を共有したい。

1. Institutional Research (IR) とは？

- 「IRとは何か」について、一概には答えられない古典的な問題である。(Terenzini, 1999)

→ IRは多義的な概念であり、米国でも必ずしも一貫した厳密な定義が存在するわけではない。部署の構成や業務内容は大学の属性によって異なるうえ、データ収集から戦略策定まで広範にわたる活動(現在も発展中)である。
- 最も広く受け入れられているのは、Fincher(1978)及びSaupe(1990)の定義。(Howard et.al, 2012, 第2章)

1. Institutional Research (IR) とは？

- Fincher (1978)
 - Institutional Research as “organizational intelligence”
→ 収集したデータを分析し情報に変換する組織的な知性
- Terenzini (1999)
 - Technical/Analytical Intelligence
→ 調査設計や統計手法等、調査・分析に要する専門的・分析的な知性
 - Issue Intelligence
→ 組織内の課題、意思決定における重要度等の理解に要する知性
 - Contextual Intelligence
→ 高等教育全般、組織の歴史や文化等の文脈の理解に要する知性

1. Institutional Research (IR) とは？

- Saupe (1990)
 - Institutional Research as “decision support”
 - 意思決定を支援するうえで必要な情報を提供するため
に行う調査・研究

具体的には、以下の6つからなる。

- 計画策定の場における特定の問いに応える「応用研究」
- 教育プログラムや組織の自己点検に必要な情報を集める「評価」
- 大学の総括的な情報を扱う「基礎研究」
- 懸念が生じるような状況を見分ける「問題発見」
- 特定の相手と協働しながら研究を進める「アクション・リサーチ」
- 学内の諸方策の分析を行う「政策分析」

1. Institutional Research(IR)とは？

表2 IR室のミッション・ステートメント等で良く使われている語幹

語幹	provid	data	support	plan	inform
日本語訳	提供	データ	支援	計画	情報
出現頻度	22	25	30	36	37



図1 IR室のミッション・ステートメント等に含まれる語によるワードクラウド (Word Cloud)

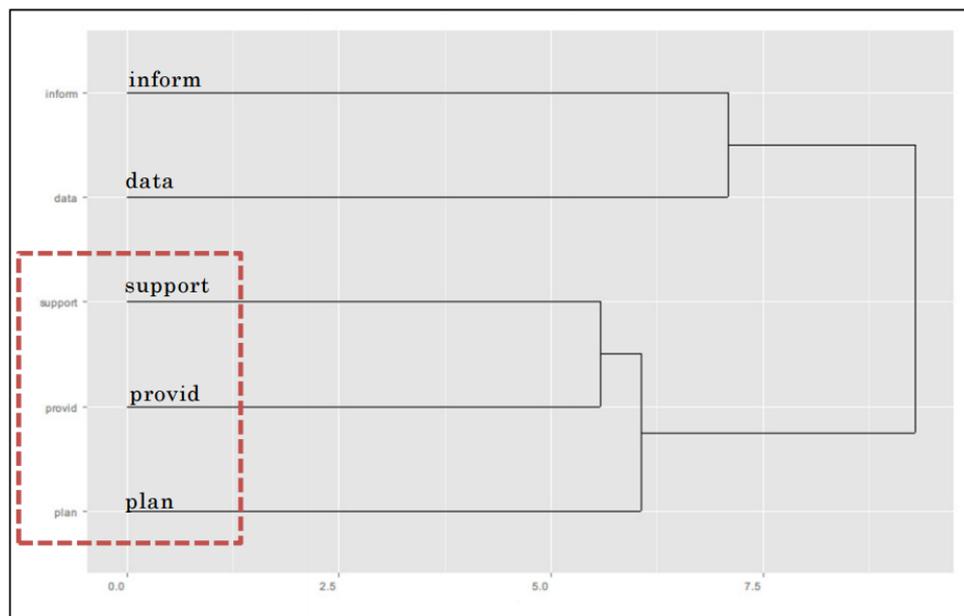


図2 表2で示した5つの語幹に対するクラスター分析結果

出所： 藤原(2015)、pp.20-21。

1. Institutional Research (IR) とは？

- まとめ



- IRの役割: 意思決定、または改善の支援

- 執行部の役割: 意思決定、または改善

IRとは「ある特定の目的に沿って情報を収集し、それらを加工・統合して分析し、計画立案や意思決定を支援するために展開される活動の総称」として捉えることができる(浅野, 2016)。

2. 米国におけるIRの現状～全体概況1～

- IR部署の主な顧客

FIGURE 1: INSTITUTIONAL RESEARCH AS SERVICE PROVIDER (RANKED SET OF CLIENTS)

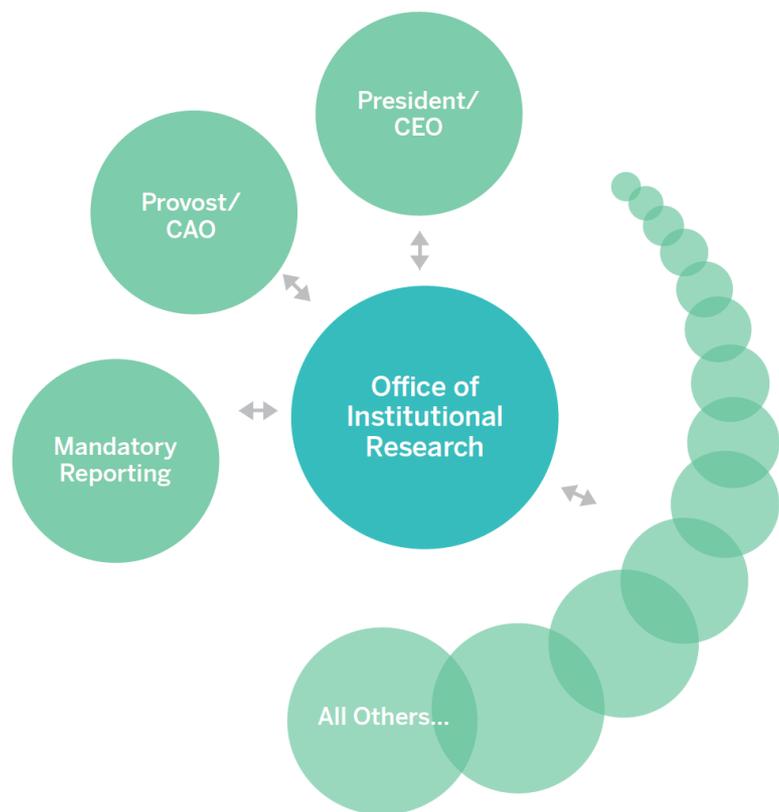
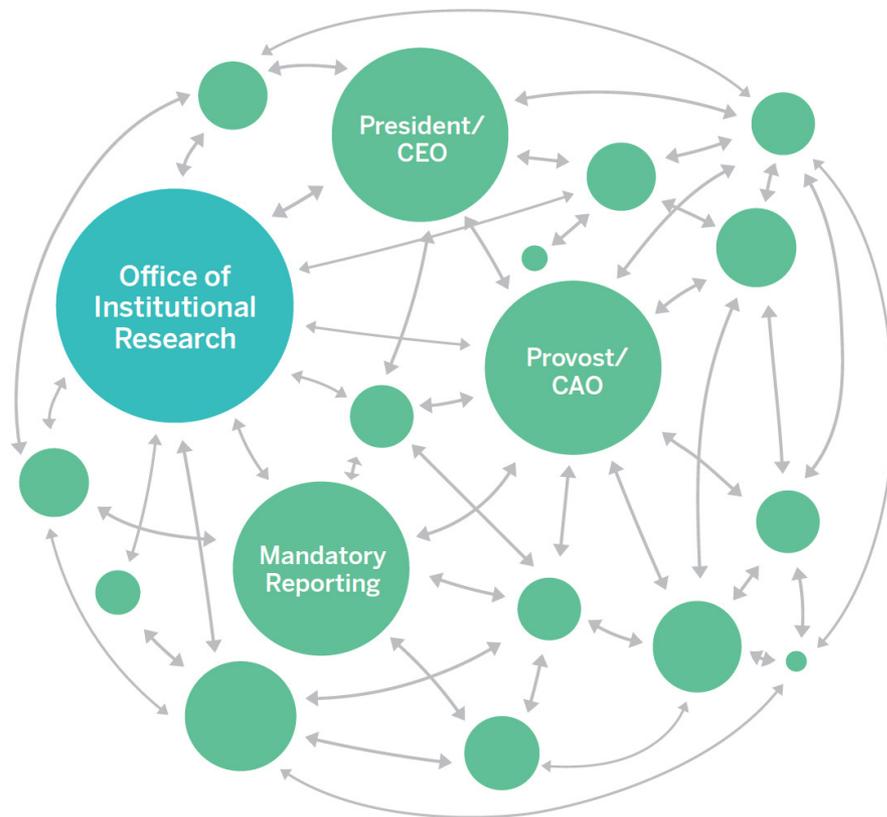


FIGURE 2: INSTITUTIONAL RESEARCH AS FEDERATED NETWORK



出所: Swing(2016)、pp. 7。

2. 米国におけるIRの現状～全体概況2～

• IR部署の体制と主要業務

Director and Professional OIR Staff	2-Year Institutions	4-Year Institutions
Less than 1 FTE	1%	1%
1 FTE to fewer than 2 FTE	17%	18%
2 FTE to fewer than 3 FTE	41%	35%
3 FTE to fewer than 5 FTE	28%	26%
5 FTE to fewer than 10 FTE	12%	17%
10 FTE or more	1%	3%

N = 1,261 responses (394 responses from 2-year and 867 responses from 4-year institutions)



PRIMARY RESPONSIBILITY

83% data reporting – federal mandatory (81% primary responsibility for IPEDS reporting)

81% data reporting – guide books/rankings

81% institutional fact books

80% data reporting – state mandatory

74% enrollment reporting and analyses

64% data sharing with consortia

53% key performance indicators development/monitoring

出所: AIR(2016)、pp. 5-6。

2. 米国におけるIRの現状～全体概況3～

• IR部署の関連業務



SHARED RESPONSIBILITY

67% contribute to accreditation studies

62% contribute to strategic planning

58% contribute to program accreditation

53% contribute to learning outcomes assessment



NO RESPONSIBILITY

69% student financial aid modeling

65% institutional budget/finance modeling

61% student borrowing/debt studies

60% class scheduling/demand studies

60% space utilization studies

57% salary equity studies

出所： AIR(2016)、pp. 6。

2. 米国におけるIRの現状～個別業務: IPEDS～

- Fall Collection
 - Institutional Characteristics
 - Completions
 - 12 month Enrollment
- Winter Collection
 - Student Financial Aid
 - Graduation Rates
 - 200% Graduation Rates
 - Admissions
- Spring Collection
 - Fall Enrollment
 - Finance
 - Human Resources
 - Academic Libraries

日本の学校基本調査は年一回のデータ提出で完了するが、IPEDSは同一年に複数のデータ提出が求められる。

▪ DFR Comparison Group Update



IPEDSのデータを提出した上で、各大学が自分達の競合大学の選考基準を設定し、競合比較 (Benchmark) の報告書として、関心のあるデータ項目を独自に選定して作成。

2. 米国におけるIRの現状～個別業務:報告書等～

- Factbook (Fall, Spring, Summer)
- Program Factbook/Reviews
- Fast Facts/Quick Facts

Factbook(大学概要)は年度別と学期別など、複数作成される場合がある。

- Enrollment projection model
- Grade distribution analysis
- Job placement report
- Barrier courses report
- Campus profile report
- Competitor Analysis report

Factbookは教務から財務までの各種データを総合的に集約しており、そのデータを用いて目的別の報告書を作成する場合が多い。

2. 米国におけるIRの現状～個別業務：大学ランキング等～

■ US News

- Best Colleges（大学類型別に全国版と地域版のランキング）
- Best Graduate Schools（専攻ごとのランキング）
- Online Degree Programs（オンライン・プログラム限定のランキング）
 - Main Survey
 - Tuition
 - Financial Aid
 - Finance
 - Assessment

上記3つのランキングでデータ項目に多少の違いはあるが、主に左側の分類で収集される。

■ Peterson's Graduate/Undergraduate Survey

■ College Board

■ Common Data Set

照会先によってデータ定義が異なり、個別に対応すると作業が煩雑になるため、大学側が任意のコンソーシアムを立ち上げ、大学間で共通のデータセットを作成。

2. 米国におけるIRの現状～個別業務:アセスメント～

- アセスメント担当者は個別対応でデータを集める必要がある。
 - Program level outcome (学科の学習成果の診断)
 - Gen Edu value rubric (一般教養教育のルーブリック)
 - Electronic portfolio (学習ポートフォリオ)
 - Standardized Test (統一試験、批判的思考、情報リテラシーなど)
 - Graduate Survey (卒業生アンケート)
 - Program Review (学科の自己点検の一部で、学習成果の測定と結果の活用を報告するよう求められる)
- アセスメントでは、改善のために収集した情報や改善の進捗状況を説明責任として外部に報告するという発想。
- 対照的に、IRは外部への説明責任のデータを学内の改善に活用するという流れ。

2. 米国におけるIRの現状～個別業務:その他～

- Accreditation Agency Report (機関別、プログラム別の適格認定へのデータ対応)
- Delaware Study (学部別の教育コスト分析と競合比較)
- Funding Agency Report (研究や教育の助成団体への報告)
- Credit and Revenue Distribution Reports (学生の履修単位と歳入の分析)
- NSSE/CCSSE (学習実態調査)
- Other Ad-hoc data collection and analysis (臨時のデータ分析やアンケート調査など)

3. 日本におけるIRの現状～IR組織、体制等～

項目		H23	H25
IR組織の 設置状況 (n=762)	専門の担当部署がある	56 (7.4%)	96 (12.6%)
	専門の担当部署はないが、 委員会方式の組織がある	77 (10.1%)	132 (17.3%)
IR組織の 体制 (n=762)	専任教員を置いている	16 (2.1%)	25 (2.1%)
	人数 IRを研究の対象としている		26
	IR研修会等の参加者		4
	その他		18
	専任職員を置いている	44 (5.8%)	67 (8.8%)
	人数 IRプログラムの受講者		7
	IR研修会等の参加者		74
	その他		70

出所： 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室(2015)、pp. 61。

3. 日本におけるIRの現状～主要業務等～

項目	H23	H25
自己点検評価に必要なデータの収集や分析等、自己点検評価に関連する業務	42 (5.5%)	59 (7.7%)
認証評価機関への報告書の作成や必要なデータの収集等、認証評価に関連する業務	41 (5.4%)	54 (7.1%)
学生の学修成果の評価のためのデータ収集、評価の実施・分析	21 (2.8%)	45 (5.9%)
学生、大学教員、大学職員に関するデータ収集、分析	17 (2.2%)	45 (5.9%)
学生の学修時間の把握のためのデータ収集、分析	11 (1.4%)	43 (5.6%)
その他の評価(国立大学法人評価やその他の第三者評価等)に必要なデータの収集等、その他の評価に関連する業務	30 (4.0%)	42 (5.5%)
学内の意思決定に資する提案書の作成	22 (2.9%)	27 (3.5%)

出所： 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室(2015)、pp. 62。

3. 日本におけるIRの現状～個別業務等～

- ファクトブックの作成
- データベースの設計、構築、運用等の支援
- 学生の成績（GPA）推移、就職情報等の分析
- 大学運営における指標やKPI設定、活用の支援
- 計画策定、各種評価に係る支援
- 授業アンケート等の分析による教育改善支援
- 留年、中退、退学に係る要因分析、予測モデルの構築

出所： 大学評価コンソーシアムが発刊（H26～）している情報誌「大学評価とIR」掲載論文から抽出。

3. 日本におけるIRの現状～国立大学の例～

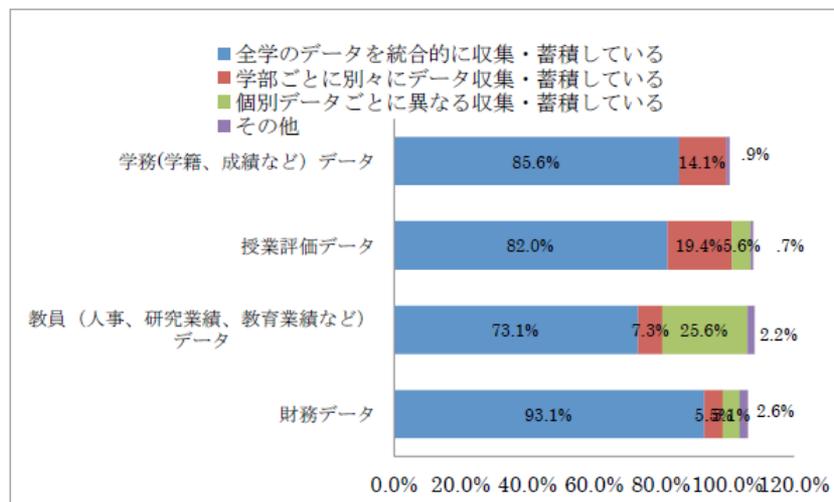
表3 日本の評価業務を基盤としたIRオフィスと
BSU/NTCのIRオフィスとの比較

	日本（茨城・神戸・新潟・鳥取）	米国（BSU/NTC）
1：IRオフィスの主たる関心	説明責任（第三者評価）のための報告業務	大学経営支援および説明責任を果たすための情報提供
2：数量データに対する執行部の関心	関心が高いとは言えない。	関心が高い
3：扱うデータの中身	叙述資料と少ない数量データ	経営に影響を及ぼす数量データ
4：数量データの分析	アドホックな要請に基づき実施	数量データの集計までは定型業務（高度な分析はそのオフィスの人材に依存する）
5：データベース	あまり整備されていない	整備されている
6：スタッフ	異動を伴う事務系職員中心	専門職化が進んでいる

出所： 鳶田・藤原・小湊(2016)、pp. 297。

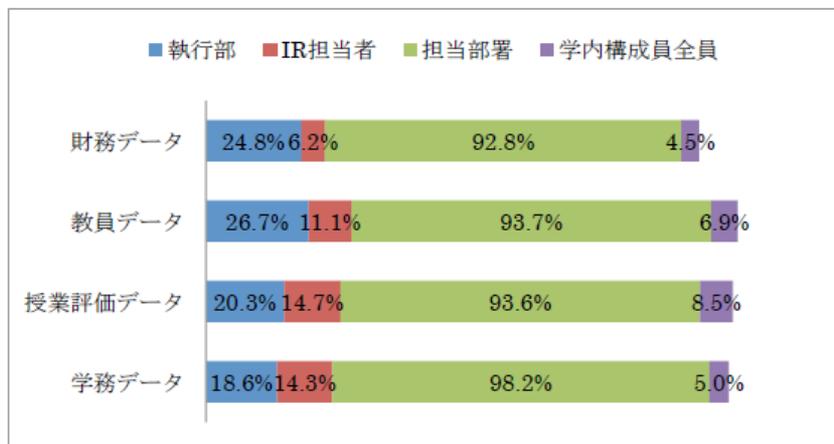
3. 日本におけるIRの現状～情報基盤とアクセス～

図 4-13 データの収集・蓄積状況



多くの大学(73.1～93.1%)では、全学のデータを収集・蓄積する業務ベースの仕組みを有している。

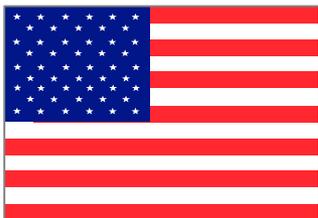
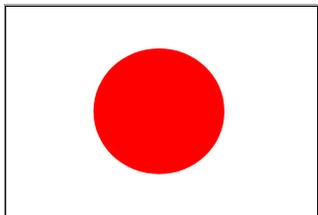
図 4-14 データへのアクセス権限



IR担当者がデータにアクセスできる権限は極めて低い(6.2～14.3%)。

出所： 東京大学(2014)、pp. 48。

4. 日米のIRを取り巻く環境～情報基盤～



機関レベル

独自開発の統合型DB(九大、神大、山大、明治大など)



任意の取組



- Access to Success
- Achieving the Dream
- Aspen Prize for Com.Col Exc.
- Completion by Design
- Complete College America
- Consortium for Std. Ret. Data Exch.
- The Equity Scorecard
- N. Col. Athletic Assoc. Ed. And RD
- N. Com. Col. Benchmark Project
- Predictive Analytics Rep. Framework
- Student Achievement Measure
- SREB Data Exchange
- Transparency by Design
- Vol. Frame. Of Accountability
- Vol. Institutional Metrics Project
- Vol. System of Acc. Col. Portraits
- WICHE Multi. Long. Data Exchange

国レベル

大学ポートレート

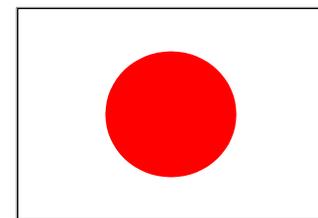
Japanese College and University Portraits



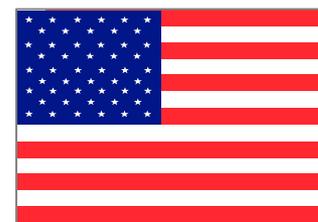
4. 日米のIRを取り巻く環境～高等教育政策～

• 成果重視の高等教育政策への転換

- 財源縮小と強力なアカウントビリティ(説明責任)の要請
- 高等教育の私学化と学生納付金への依存度の上昇
- 規制緩和と管理運営の責任増大
- 高等教育への市場原理の導入
- 高等教育の質の向上に対する社会からの要求増大



内部質保証



Institutional Effectiveness

4. 日米のIRを取り巻く環境～アセスメント1～

- 新たな枠組みの検討

IR

学生データ

- 入学
- 奨学金
- 在籍率
- 成績
- 卒業率
- 就職率

Assessment

アンケート調査

(間接指標)

- 新入生
- 学習実態
- 満足度
- 卒業生

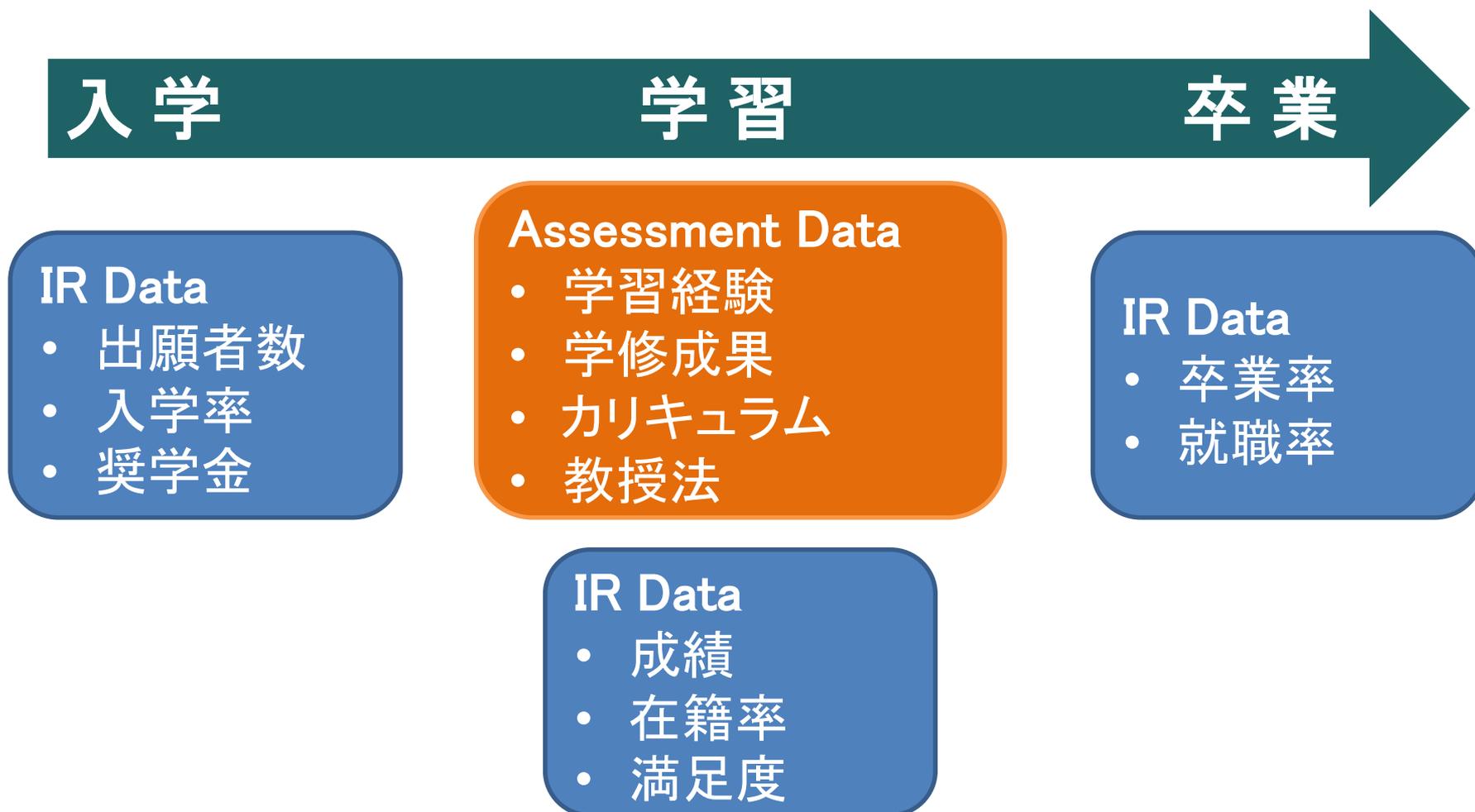
学習成果データ

(直接指標)

- ルーブリック
- ポートフォリオ
- 試験
- 論文

出所: 本田(2015)、スライド18。

4. 日米のIRを取り巻く環境～アセスメント2～



出所： 本田(2015)、スライド20。

5.山形大学における実践事例～EMIR～

入学

学習

卒業

IR Data

- 志願者倍率
3.3以上
- 定員充足率
100%以上

Assessment Data

- 学習経験
- 学修成果
- カリキュラム
- 教授法

IR Data

- 卒業率
90%以上
- 就職率
96%以上

IR Data

- GPA
2.5以上
- 退学率
5%未満
- 満足度
4.0以上

この部分が弱い現状。
改善または質の向上において、不可欠な情報となる？

5.山形大学における実践事例～アセスメント～

- アセスメント＝Weigh Pig, Feed Pig, Weigh Pig”



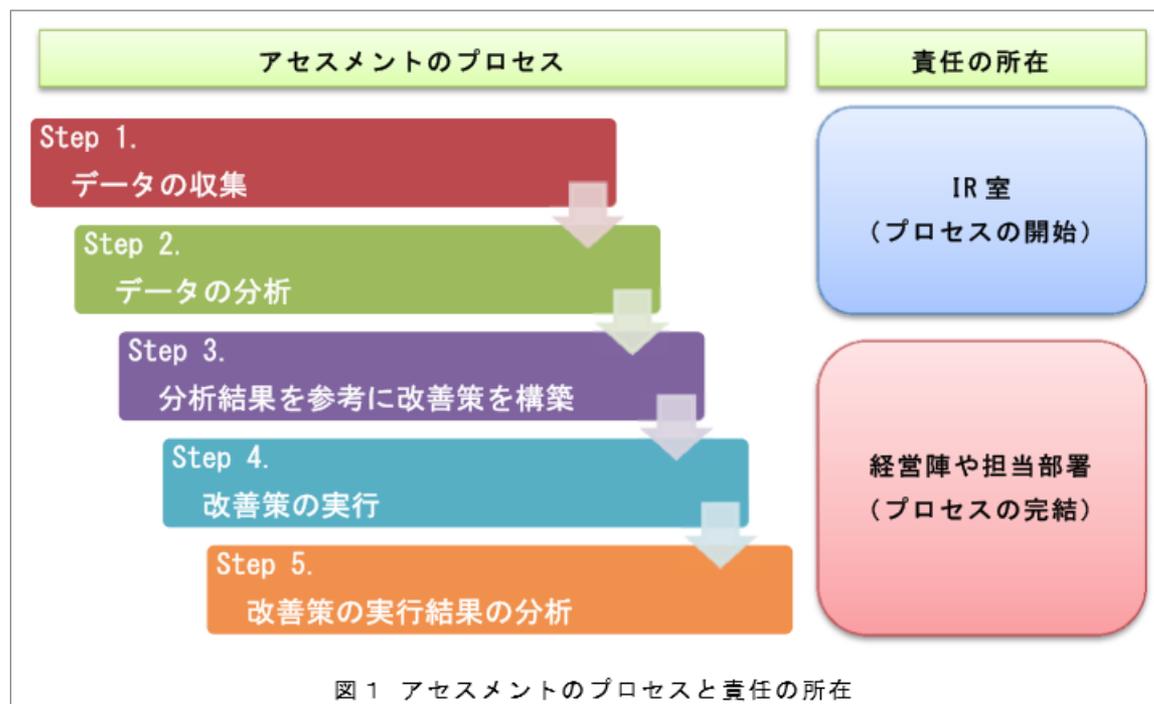
出所： Keston et al.(2014)を参照して、報告者作成。

5.山形大学における実践事例～アセスメント～

・ 対象、プロセス、責任の所在

表1 対象ごとに異なるアセスメントの名称

アセスメントの対象	アセスメントの名称
学生	アセスメント
学部・学科（主に学科）	プログラム・レビュー
大学全体	Institutional Effectiveness (IE)



出所： 藤原(2015)、pp. 5-6。

5.山形大学における実践事例～アセスメント～

・プログラム・レベルの枠組み整理

教育プログラム

教育目標

DP

CP

AP

「学位プログラム」ではなく、教育目標を最小単位とする「教育プログラム」という考え方に準拠

学部	学科	コース	学位	教育プログラム
地域教育文化学部	地域教育文化学科	児童教育コース	学士(教育学)	児童教育学
		異文化交流コース	学士(学術)	異文化交流学
		造形芸術コース		造形芸術学
	
医学部	医学科		学士(医学)	医学
	看護学科		学士(看護学)	看護学
理学部	数理学科		学士(理学)	数理科学
	物理学科			物理学

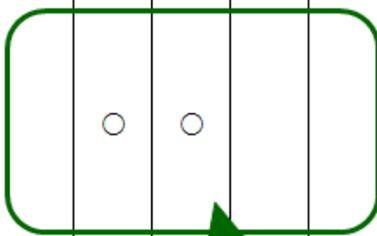
5.山形大学における実践事例～アセスメント～

・ プログラム・レベルのDP,CPの一貫性確保

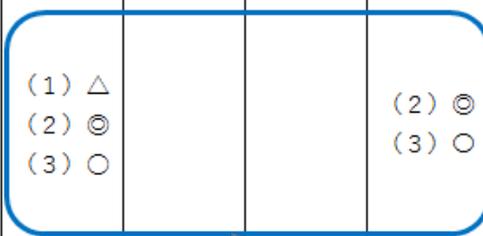
カリキュラムチェックリスト作業様式 (案)

学部名： ○○学部 教育プログラム名○○学

教育課程の編成・実施方針 (CP)					カリキュラム				学位授与方針 (DP)			
CP1	CP2	CP3	CP4	CP5	科目名	担当教員	授業の目的	授業の到達目標	DP1	DP2	...	DPO
○	○				基礎生命科学	山形太郎 山形花子 他○○教員	医学の基礎知識として必要となる、化学、生物学、物理学及び生化学について、「医学教育における準備教育モデル・コア・カリキュラム」に準じて指導する。	(1) ○○に関する基礎的知識を把握する。 (2) △△に関する問題意識を持つ (3) ◇◇的なものの見方・考え方を身に付ける。	(1) △ (2) ◎ (3) ○			(2) ◎ (3) ○



○ CPと対応している
※ 該当しない場合は空欄



◎ DP達成のために、特に重要な事項
○ DP達成のために、重要な事項
△ DP達成のために、望ましい事項

5.山形大学における実践事例～アセスメント～

- プログラム・レベルの枠組み整理(課題)
 - Admission Policyとの一貫性確保
 - カリキュラムチェックリスト及びカリキュラムマップの作成単位
 - 基盤教育と専門教育、個々の科目の順次制確保
 - シラバスの記載マニュアル見直し
 - アセスメントチェックリストの作成
 - 学生からのフィードバック確保
 - カリキュラム、3ポリシーの見直しを継続的に実施していくための合意形成

5.山形大学における実践事例～アセスメント～

大学全体の測定ツールの開発・実施

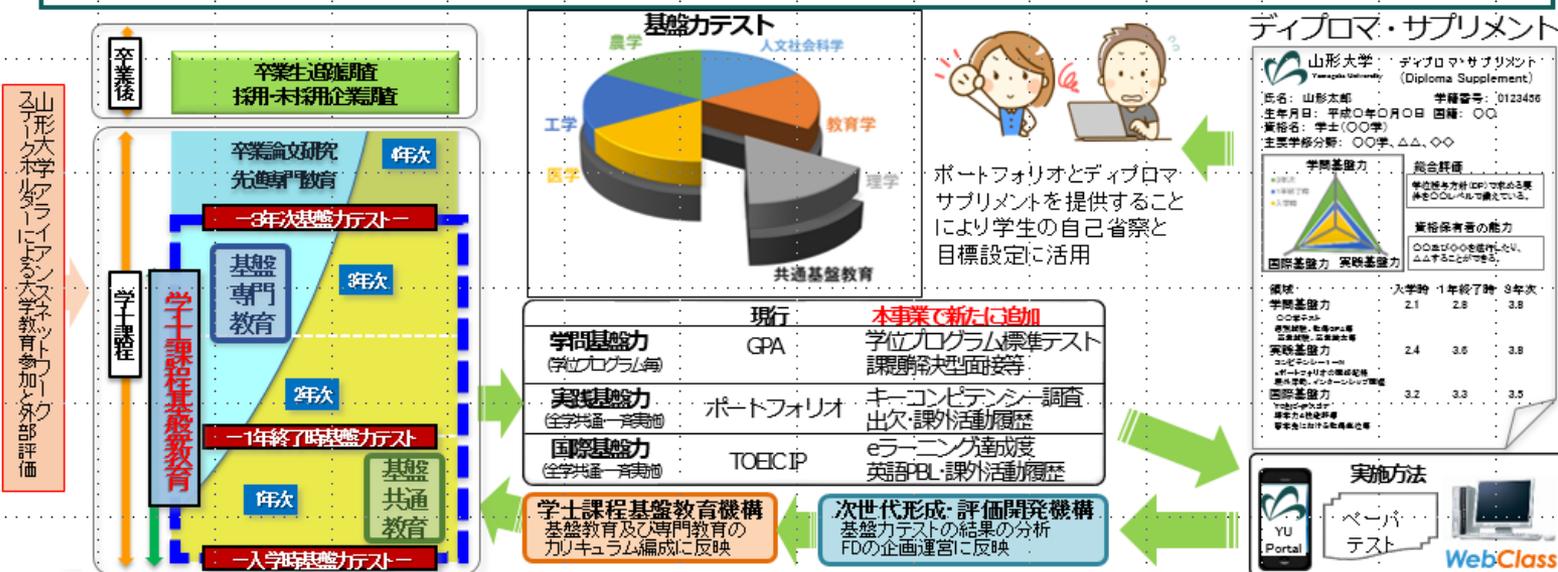
平成28年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組



大学等名：山形大学
 テーマ：テーマV（卒業時における質保証の取組の強化）



全学横断の基盤力テスト及び山形大学アライアンスネットワークによるステークホルダー外部評価を通じた卒業時の質保証
 学修達成度を3年3回3種の基盤力テストで定量化し、客観的な指標による教育の質保証とPDCAサイクルの実質化
 地域企業・自治体・教育委員会・保護者からなる山研大学アライアンスネットワークを母体に教育改善アドバイザリーボードを形成

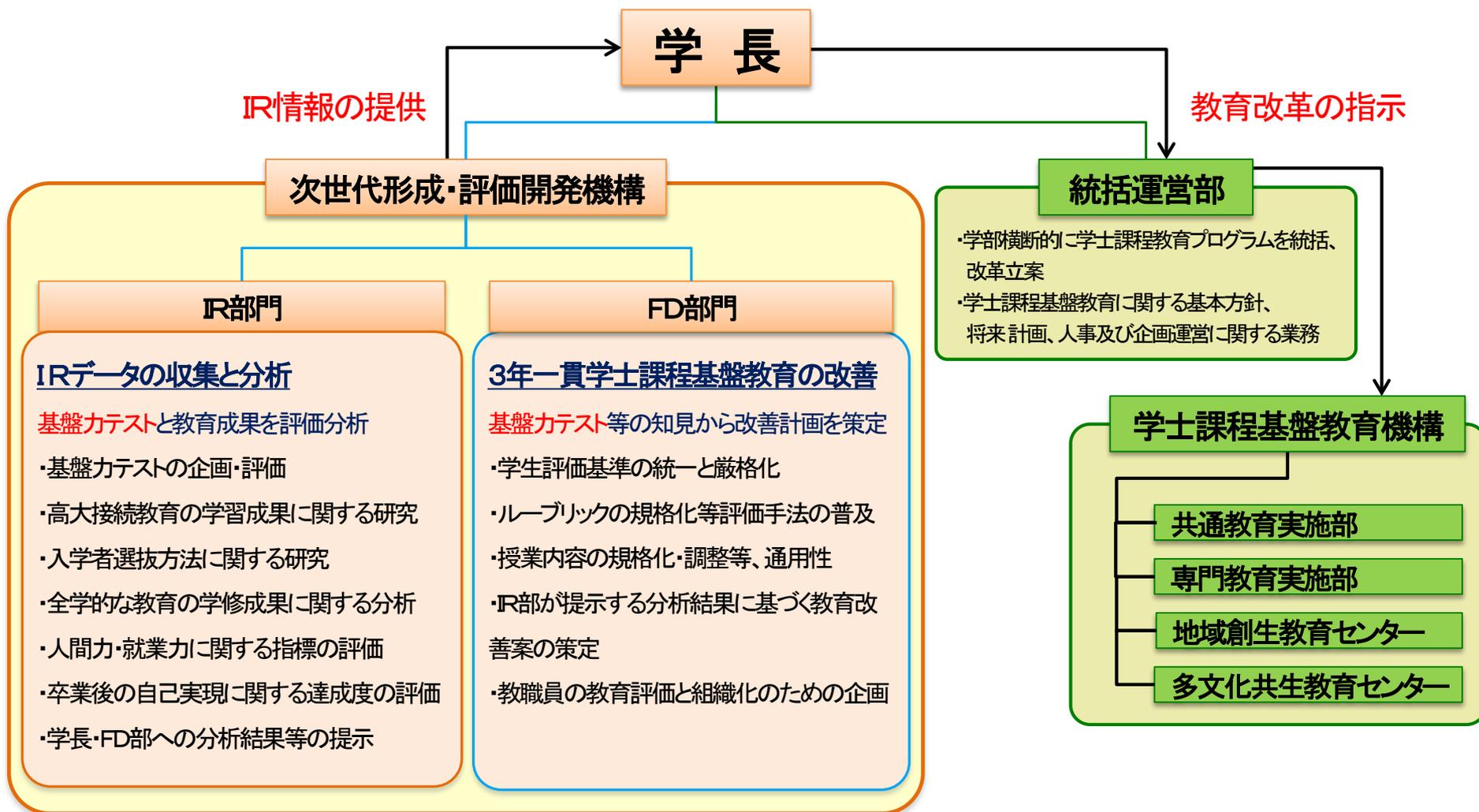


ポートフォリオとディプロマ・サプリメントを提供することにより学生の自己省察と目標設定に活用

山形大学独自の基盤力テストの実施による直接評価をはじめとした教育指標の評価により教育改善を効率的に遂行
 ステークホルダー（地域企業・自治体・教育委員会・保護者）によるアドバイザリーボードが大学教育の評価と改善に積極的に関与
 インターンシップやPBL、フィールドワーク等の実践型・課題解決型授業を通して、学生の主体的・協働的な学びを充実
 学長主導の教学マネジメントによる全学統合的な3年一貫学士課程教育を実質化し、大学全体の教育パフォーマンスを向上

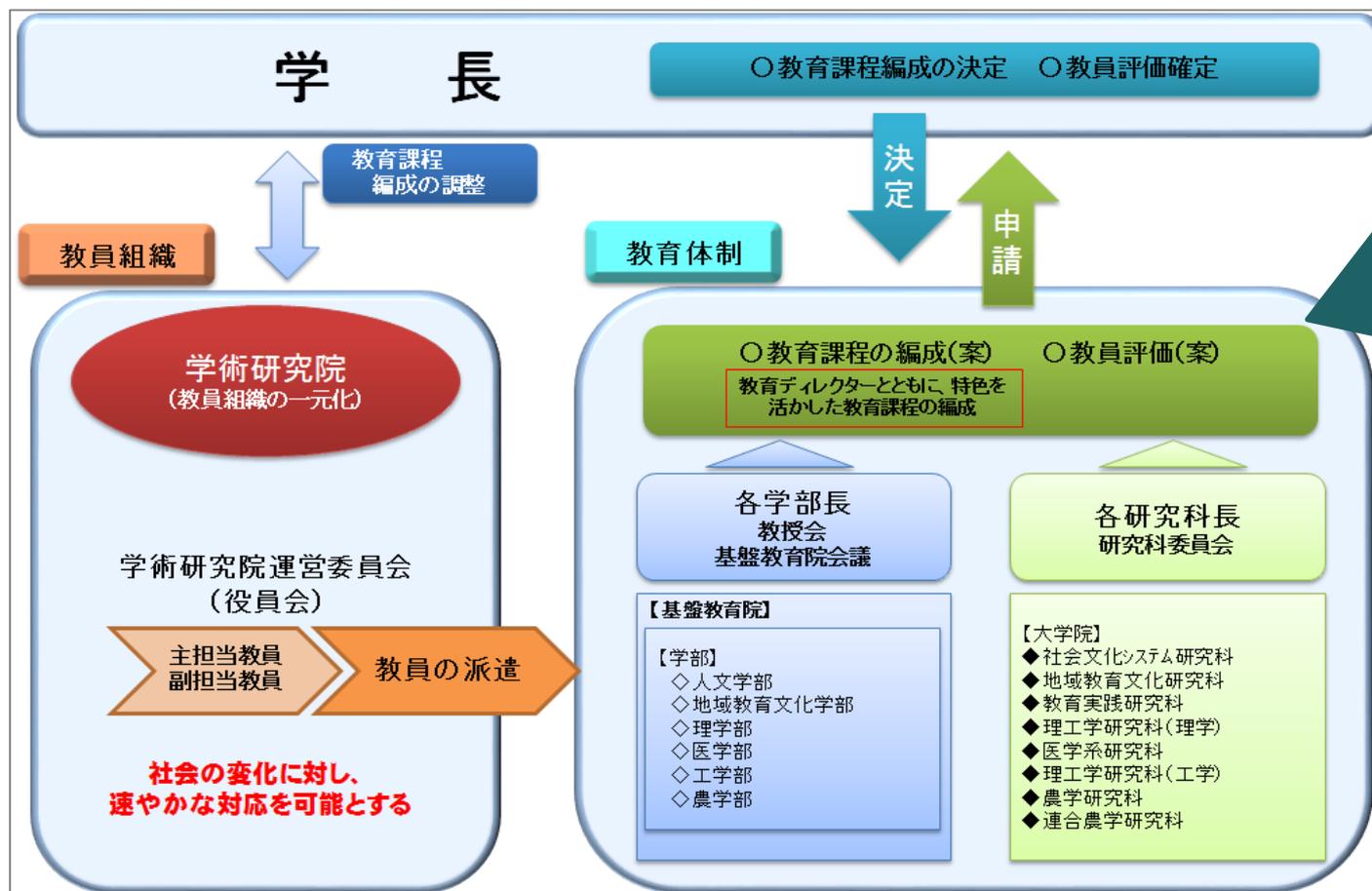
5.山形大学における実践事例～アセスメント～

・ 大学全体のアセスメント実施体制



5.山形大学における実践事例～アセスメント～

• 大学全体の教学マネジメント



教育課程編成：
各学部，大学院各
研究科及び基盤
教育院（以下「学
部等」という。）の
長は，当該年度の
学年開始前の学
術研究院長が定
める日までに，当
該学部等における
教育課程編成案
（授業科目名及び
その担当教員を含
む。）を学術研究
院長に提出しなけ
ればならない。

6.まとめ

■ 日米のIRに共通する課題

- 社会、政府等からの各種要請に応え得る効果的な情報発信
- 解明した課題等の継続的な改善(質保証≒IE)

■ 現在の日本のIRの課題

- データ分析を行う環境が整っていないままIRを立ち上げているため、分析のベースとなる基礎データが得られず、報告業務すらままならない。
- 学内にデータベースが乱立し、それぞれが連結されておらず、部署間でのデータシェアも行われていない。
- IRに対して過度な期待が抱かれているが、IRの役割は課題を明らかにすることであって、解決することではない。課題解決や改善は執行部および教員が行い、それを支援するのがIRの役割。

6.まとめ

情報収集

情報分析

計画立案

施行支援

- IRにとって、データは全ての出発点。データを意味ある情報に変換するためには、目的に応じて体系化する必要がある、その手段として、データベースを整備していくことが重要となってくる。
- しかしながら、データベースがあれば、全てがうまくいくとは限らない。肝心なことは、学内に散在するデータの特性を理解し、手動でもよいので、まずはこれらを統合して分析等に活用することから始めること。
- アセスメントについては、必ずしもIR部署が担う必要はないが、どこかが牽引する必要がある。他部署、現場の教員と協働しながら、枠組みの整理、体制整備等を進めていくことが肝要。
- そのことで、IRの必要性が学内で理解され、将来的にデータベースの構築や、アセスメントの結果等に基づく大学教育の改善についての合意が得やすくなる。

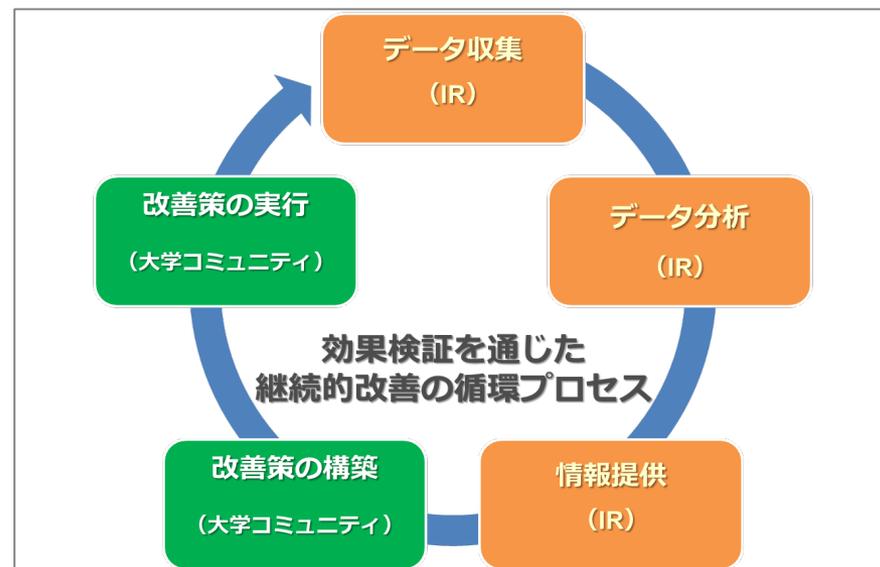
参考：山形大学におけるIRの今後の展望

• IRからIEへ

O 山形大学で学んで本当に良かった!!
そう言ってもらえるために

IR もっと学生や大学のことを知り抜いて

IE 継続的改善を支援する



【ホームページ】

URL: <https://ir.yamagata-u.ac.jp/>

キーワード: 山形大学 OIRE

OFFICE OF INSTITUTIONAL RESEARCH & EFFECTIVENESS

山形大学次世代形成・評価開発機構IR部門
Office of Institutional Research & Effectiveness (OIRE)

ミッション・ステートメント

山形大学次世代形成・評価開発機構IR部門 (Office of Institutional Research & Effectiveness, OIRE) は、データの収集および分析を行い、大学コミュニティへの情報提供を通じて、山形大学の継続的改善と、データに基づく意思決定を支援します。

Mission Statement

【参考文献・参考資料】

- Association for Institutional Research(2016), “National Survey of Institutional Research Offices”.
- Fincher, C.(1978), Institutional Research as organizational intelligence, *Research in Higher Education*, 8(2), pp.189-192.
- Howard, R.D; McLaughlin G.W.; Knight W.E. and Associates (2012) , *The Handbook of Institutional Research*, Association for Institutional Research, Jossey-Bass Inc.
- Keston H. Fulcher, Megan R. Good, Chris M. Coleman, and Kristen L. Smith.(2014), “A Simple Model for Learning Improvement: Weigh Pig, Feed Pig, Weigh Pig”, National Institute for Learning Outcomes Assessment, Occasional Paper#23.
- Saupe, J. L.(1990), “The Function of Institutional Research 2nd Edition”, Association for Institutional Research.
- Swing, R. L.(2016), “Institutional Research Capacity: Foundation of Federal Data Quality”, National Postsecondary data infrastructure.
- Terenzini, P.(1999), On the Nature of Institutional Research and Knowledge and Skills It Require, *New Directions for Institutional Research*, no. 104, Winter 1999, pp. 21–29.
- 浅野茂 (2016) , 「データベースの構築とIRの課題」, 高等教育研究第19集, pp.49-66.
- 寫田敏行・藤原宏司・小湊卓夫 (2016) , 「日米における中規模大学のIR活動に関する事例研究」, 名古屋高等教育研究第16号, pp.287-304.
- 小林雅之・山田礼子 (編) , 『大学のIR 意思決定支援のための情報収集と分析』慶應義塾大学出版会.
- 東京大学 (2014) , 平成24-25年度文部科学省大学改革推進委託事業『大学におけるIR (インスティテューショナル・リサーチ) の現状と在り方に関する調査研究報告書』.
- 藤原宏司 (2015) , 「IR 実務担当者からみた Institutional Effectiveness ～米国大学が社会から求められていること～」, 大学評価とIR第3号, pp.3-10.
- 本田寛輔 (2015) , 「米国の中規模州立大学における学習成果の診断 (Assessment)」, 大学評価コンソーシアム「米国におけるアセスメント実践事例に関する勉強会」.
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2015) , 「平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」.

ご清聴、 ありがとうございました!!

本報告に対するご意見、お問い合わせは、
以下のメールアドレスまでお願い申し上げます。

E-mail: asano@cc.yamagata-u.ac.jp

